

立ち読み版



Institution for a Global Society 株式会社
代表取締役社長

ふくはら まさひろ

福原 正大さん

1970年東京都生まれ。慶応義塾大学卒業後、1992年に東京銀行に入行。2000年に世界最大の資産運用会社パークレイズ・グローバル・インベスターズに転職し、35歳にして日本法人取締役就任。2010年に独立してIGSを設立。英語で学ぶ学習塾の経営に始まり、教育分野に加え、人事分野でのビッグデータ生成のビジネスを企業や教育機関に提案している。一橋大学と慶応義塾大学で特任教授を務める。著書に『ストーリーで読む 世界で通用する人のための勉強入門』(PHP研究所)、『人工知能×ビッグデータが「人事」を変える』(共著、朝日新聞出版社)など。

【写真】安岡 嘉

AI×ビッグデータを活用した 教育と人事で人を幸せにしたい

【取材・文】原 正紀

株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役・高知大学客員教授・成城大学非常勤講師。中小企業診断士。早稲田大学法学部卒業後、大手メーカー、株式会社リクルートでの勤務を経て、独立。産学公個に対し、採用・育成・人事制度構築など、人材関係の幅広い提案を行う。著書に『採用水河期』(日本経済新聞出版社)、『優れた企業は日本流』(扶桑社)、『インタビューの教科書』(同友館)など多数。

HARA'S
BEFORE

以前、私たちが主催する人材に関する勉強会で、福原さんにHRテクノロジーについて講演してもらった。先進情報と鋭い感性に満ち溢れたお話は刺激的なものだった。

AIやビッグデータは、関連情報を目にしない日がないくらいの時代のキーワードになっている。だが、その実体験やビジネスでの活用プランを持っている人は、日本ではまだ少ないのではないかな。

福原さんのお話をぜひ、未来のビジネスプランの参考にさせていただきたい。



「Who am I?」をAIで突き詰める

原：HRテクノロジーの分野でご活躍中ですが、現在はどんな事業に取り組んでおられますか。

福原：大きくは、「人事」と「教育」の2つのことに取り組んでいます。私が一番やりたかったテーマは、「Who am I?」、「自分とは何者なのか?」を、テクノロジーや教育の力を借りて突き詰めるということです。ただ、日本の典型的な教育ではなかなかできないと思い、さらに当初からグローバルな方向で考えていたので、すべて英語で「自分について深く考える」塾を始めました。今はそれを会社にまで広げて、「社会における自分とは何者なのか?」を突き詰めていくのに、AIを使用して可視化データとしています。

AIは結局、計算機でしかありませんから、その前のビッグデータをどう作るのかが重要です。今の私たちがExcelやWordを使っている

ように、AIを当たり前を使う時代がまもなく来るでしょう。そうなったときに自分自身の独自データを、どのように集めるかが大事になってきます。私たちはそのコアのデータを生成するサポートをしています。人事と教育の領域に分けているのは、それが単純にわかりやすいからです。私たちには、幼少期から「自分とは何者か」というデータを積み上げて、時系列の変化を取り、ビッグデータを作るという事業基盤があります。一方で、継続的にビジネス化する観点では、企業の人事領域が対象になります。

原：やはり、B to Bがビジネスになりやすいですか。

福原：私たちはまだ社員30数名の中小企業なので、現状のビジネスのターゲットは主に大企業に絞っています。私たちのバリュープロポジションを明確にするためですが、データ構築に強い思いを持っている社長さんからお声がけいただいて、ご一緒することもあります。教育の事業は、B to Sになりますが、私たちはB to Cは一切やりません。ベンチャーなので、限られたリソースを使うのにレバレッジを効かせたいからです。

公的資金によるプロジェクトも行っていきます。経済産業省の「未来の教室」というプロジェクトでは、私たちの仕組みを使ってデータを取得することを決定していただきました。「学びのSTEAM化」、「学びの自立化・個別最適化」など、子供たち一人ひとりが未来を創る当事者(チェンジメーカー)になるための環境づくり

続きは雑誌で